248 健常者腰椎骨塩量の経年的変化 - Dual photon absorptiometryによる検討

荻原 聡、荒谷秀之、三木隆己、西沢良記、森井浩世 (大阪市立大学第二内科)、岡村光英、小泉義子、福田 照男、越智宏暢、小野山靖人(大阪市立大学放射線科)

わが国では、まだDual photon absorptiometry (DPA) による骨塩量の経年的変化に関する報告はほとんどみられていない。今回われわれはDPAにより、健常女性における腰椎骨塩量の2年後の変化を捉え得たので報告する。 対象は40才~55才の健常女性14名で、その第2~第4腰椎骨塩量 (BMC)を、ノーランド社製DBD2600により定量した。 BMCの1年当りの減少率は、閉経前の群では0.6%であった対し、閉経後の群では0.9%であった。 これらは Cross-sectional studyでの年平均減少率(0.72%)と類似し、個々の患者での経年的検討も臨床的に重要であると考えられた。

249 DPAを用いた青年期骨塩量測定値に影響する生活習慣要因の検討

瀬戸幹人, 利波紀久, 南部一郎, 中嶋憲一, 道岸隆敏, 高山輝彦, 久田欣一(金沢大学核医学科)

250 代謝性骨疾患における腰椎骨塩量の測定 (DPA装置を用いた検討)

大谷雅美、伊藤秀臣、山口晴司、才木康彦、柴田洋子、宇井一世、木村裕子、日野恵、池窪勝治 (神戸市立中央市民病院核医学科) 黄俊清、石原隆、森寺邦三郎、倉八博之 (神戸市立中央市民病院内分泌内科) 長谷川良一、田村清 (神戸市立中央市民病院整形外科)

代謝性骨疾患において骨塩量を測定することはその診断、病態、経過観察などの点で臨床的に重要である。我々はDPA 装置(DBD-2600、Norland社)を用いて各種代謝性骨疾患患者の腰椎骨塩量を測定したので報告する。腰椎骨塩量の正常値は健常人(100例)の測定結果より算出した。骨粗鬆症(30例)、甲状腺機能亢進症(8例)、原発性副甲状腺機能亢進症(5例)、Cushing症候群(2例)では低値をとる傾向がみられ、副甲状腺機能低下症(6例)ではやや高値をとる傾向が認められた。

251 Dual photon absorptiometry (DPA) による副甲状腺機能亢進症例の骨塩定量 — 特にPTX前後の骨塩量の変化を中心に — -

岡村光英、小泉義子、波多 信、佐崎 章、沢 久、福田照男、越智宏暢、小野山靖人(大阪市大放射線科) 荻原 縣、鑫井浩世(大阪市大第2内科)

昨年の本学会において副甲状腺機能元進症(HPT)例の 骨塩量をDPAにより測定し、健常人との比較を行った。 今回更に症例を重ね、原発性HPT 9 例、二次性(腎性) HPT43例について検討した。頭蓋骨、全身骨、腰椎の骨塩 量が健常人に比し有意に低値であり、特に頭蓋骨で顕著 であった。またPTX前後で骨塩量を観察し得た原発性 HPT 5例、二次性HPT 14例の骨変化については全例術後 数カ月で骨塩量の増加をDPAにより捉え得た。頭蓋骨、全 身骨、腰椎の骨塩量はすべて増加したが、特に頭蓋骨の 骨塩量の増加の著しい例が多くみられた。

252 慢性関節リウマチ(RA)に伴う骨萎縮 田中 亨,小池達也、油谷安孝、浅田莞爾、島津 晃(大阪市立大学整形外科) 萩原 聡、森井浩世(同第2 内科) 小田淳朗、越智宏暢(同放射線科)

我々は、Norand社製DBD2600(DPA)を用い大学RA外来通院中の女性92例の第3腰椎骨塩密度(L3BMD)を測定しRAに伴う骨萎縮について検討した。症例は26歳から75歳まで平均56.5歳であった。 L3BMDを検討した。50歳以下の群では一般健常女性と有意の差を認めなかったが、51歳以上の群では健常女性に比べ低値を示し、しかも急峻な骨塩量の減少を認めた。 閉経後骨粗鬆症においてエストロジェンが関与していることは周知の事実であるが、RAにおける骨粗鬆化においてはさらに重要な因子であると思われた。

253 胃切除後の骨塩量減少に関する検討塩見一樹、滋野長平、北村暢康、曽根照喜、李啓充、 菊池晴輝、小西淳二(京大核)、井上一知(京大一外)、 大田秀一、奥村秀雄(京大整形)

近年、胃切除術施行後の患者において、高頻度で骨代謝異常が発生することが知られている。胃切除術施行後の患者における骨変化を定量的に評価するため、最近開発されたquantitative digital radiography(Hologic 社製QDR-1000)を用いて胃切除術後の患者(男性、20名)の骨塩量を測定した。大腸切除患者を対象とした。慈恵医大法及びMD法による骨量評価も同時に行い比較検討した。